

# 理念としてのフィリピン革命

——アポリナリオ・マビニをめぐって——

永野 善子

## はじめに

アポリナリオ・マビニ（1864～1903）は、フィリピン革命期（1896～1902）にフィリピン革命政府の要人として活躍した著名な人物である。1898年からエミリオ・アギナルド将軍の首席顧問となり、革命政府の初代首相として独立革命の理念を堅持し、それを実行するための組織づくりに尽力した。このためマビニは「革命の頭脳」と呼ばれ、フィリピン革命期の英雄のひとりとしてとされてきた。著作物としては、1898年に公刊された「フィリピン共和国憲法プログラム Programa Constitucional de la República Filipina」(Mabini 1931: vol. 1, primera parte)の序文「真実の十戒 El Verdadero Decálogo」(Ibid.: vol. 1, 106-107)と1901～03年頃に執筆された「フィリピン革命 La Revolución Filipina」(Ibid.: vol. 2, sexta parte)が広く知られている<sup>(1)</sup>。

本小論では、上記二つの著作を読み解きながら、マビニが志向した「理念としてのフィリピン革命」像を追跡する試みである。マビニについての思想的研究としては、セサール・A・マフルによる古典的名著『フィリピン革命の政治と憲法の理念』(Majul 1967/1999)と『マビニとフィリピン革命』(Majul 1960/1996)がある<sup>(2)</sup>。前者は、1957年にコーネル大学から博士号を取得した論文を元にした著作であり、後者では、同論文で著者が獲得したフィリピン革命におけるマビニの政治的・思想的位置づけを発展的に解釈したものである。さらに、近年、マビニが関わった共和国憲法についての問題を扱った論文(Aguilar 2015)やマビニの思想におけるメシア的要因についての論考(Gealogo 2019)も発表されている。

本稿では、こうした研究動向を踏まえて、第1節でマビニの略歴を紹介し、第2節で「真実の十戒」の意義について考察する。そして第3節では、マビニの死後、四半世紀ほどあとに公刊された『フィリピン革命』の内容を分析することにした。

## 1. アポリナリオ・マビニの生涯

アポリナリオ・マビニは、1864年7月23日にルソン島マニラ近郊に位置するバタンガス州タナワン町で、父イノセンシオ・マビニと母デオシニア・マラハンの8人の息子の次男として生まれた。家庭は貧しく、父は無学であったが、タナワン町タラガ村の村長を務め、母は村の小学校の先生の娘であった(Majul 1964: 10-13; Zaide 1970: 282; “Apolinario Mabini” 1990: 23; Majul 1996: 63-66)。

マビニは生まれつきひ弱であったが、知的好奇心が強く、幼少のときに村を出てタナワン町の公立学校で学び、さらにリバ町の私立学校で教育を受けた。そして1881年には奨学金を獲得し、マニラの名門校サンファン・デ・レトラン大学に入学し、学生として学びながら、ラテン語の補助教員を務めた。1882年にマニラでコレラが蔓延すると、故郷に戻り、バタンガス州パウワン町で2年間ラテン語を教えていたが、1884年にマニラに戻り大学での勉学を再開したものの、マニラでラテン語の補助教員を務めることができなかった。このためバタンガス州リバ町で2年間ラテン語を教えたあと、再びマニラに戻り1887年にサンファン・デ・レトラン大学で文学士号を取得し、さらに1888年にはサント・トマス大学法学部に進み1894年に法学を修めた。法学を学ぶ間もマビニは貧しい勉学生活を送り、マニラ

の第一審裁判所の代書人などの仕事を引き受け続けた。こうしてマビニは1895年に正式に弁護士の資格を得て、マニラの友人の弁護士事務所で公証人としての地位を獲得した。ところが1896年初頭に高熱に襲われ、回復後に両足が麻痺するという悲劇に見舞われたため、その後マビニは車いす生活で公証人の仕事を続けることになった (Majul 1964: 13-20; Zaide 1970: 282-284; “Apolinario Mabini” 1990: 23; Majul 1996: 63-66)。

こうしてマビニは弁護士の道を歩みながらも、マニラと周辺諸州の政治情勢の変化に敏感に反応した。彼は1892年に「バラグタス」という名を冠するフリーメーソン組織に加入した。期せずして、ホセ・リサールが1892年にスペインから帰国し、プロパガンダ (啓蒙改革) 運動を本国で展開するために「フィリピン民族同盟」をマニラで設立したが、その設立後4日目に逮捕され、ミンダナオ島ダピタンに幽閉された。しかし翌1893年にマビニは1892年に秘密結社カティプーナンを結成したアンドレス・ボニファシオとともに同「同盟」の再興をめざす中心的メンバーとなり、1894年に新たに結成された「調停者集団」の書記を務めた。1896年8月に結社カティプーナ人がマニラで武装蜂起すると、その蜂起との関連でマビニは治安警察隊に逮捕されたが、ポリオ罹患による両足の麻痺のため、サンファン・デ・ディオス病院に監禁されたのち釈放された。釈放後マビニはラグナ州で静養する傍ら、革命運動に関わる人々と接触し続けた (Majul 1964: 42-43; Zaide 1970: 284; Majul 1967: 2-3; Majul 1996: 65, 109-126)。

この間に結社カティプーナ人が先導した独立革命は、マニラと周辺諸州における革命軍とスペイン軍との戦いへと急拡大していった。なかでもカビテ州で町長の職にあったエミリオ・アギナルドの勢力が優勢となった。ところが1896年10月にスペイン本国から3万人の軍隊が到着すると、戦局は一変して革命軍に不利となり、またスペイン政庁による弾圧も強化されて、同年12月にはリサールがマニラで処刑された。こうしたなかで、革命軍内部におけるボニファシオとアギナルドの間の主導権争いが表面化し、1897年5月にボニファシオはアギナルドによって反逆罪の廉で処刑され、以後アギナルドが革命の主導権を掌握した。そして戦況不利とみたアギナルドら革命指導部は1897年12月にスペイン軍とビヤクナバト協約を結び、香港に亡命した (Majul 1967: 3-6; 池端・生田 1977: 68-74; 池端 1987: 167-181; 永野 1995: 12-13)。

ところが、1898年4月の米西戦争の勃発によって、革命は新しい段階を迎えることになった。アメリカがキューバをめぐるスペインに宣戦布告し、フィリピンヘデューイ提督指揮下の軍隊を送ったからである。フィリピンの対スペイン独立革命へのアメリカの介入を知ると、マビニは、香港に亡命していた革命軍指導部にスペインが米西戦争で敗北した場合にアメリカがフィリピンを割譲する可能性について分析した声明文を送り、新しい状況下において独立を維持する重要性を訴えた。この声明は革命指導部によって高く評価され、アメリカの支援によって力を得たアギナルドらが再び革命軍の指揮をとるために1898年5月に帰国し、6月12日にカビテ州で独立宣言をおこなったとき、マビニはアギナルドへの助言者として迎えられた。以後、マビニはアギナルドの首席顧問として革命政府の組織体制を整えるために尽力した。その最も重要なもののひとつは、1898年6月23日のアギナルドの布告であった。同布告は、従来の独裁政府から革命政府への移行、地方政府 (州・町) と司法・警察の再組織化、固定資産の住民登録、正規軍に関する規約、その他政府業務に関する規約を定めたものであり、マビニが執筆したとされている。初代内閣は1898年7月に組織され、マビニは首相兼外務大臣となり、1899年5月までその地位に就いた。他方、革命議会は、1898年9月に革命政府の新首都ブラカン州マロロス町で発足し、憲法制定作業が進められた。憲法は1899年1月に公布され、ここに第一次フィリピン共和国 (マロロス共和国) が成立した (Majul 1964, chap. 6; Zaide 1970: 284-285; “Apolinario Mabini” 1990: 24; Majul 1967: 7-10; 池端・生田 1977: 74-80; 池端 1987: 188-200)。

しかし、1898年4月にフィリピンに上陸したアメリカ軍は、アギナルドら革命政府指導部の期待に反する行動をとり続けた。アメリカ軍は同年8月に単独でマニラを無血開城し、フィリピン全土をその指揮下に置くことを宣言した。続いて同年12月には、パリでアメリカとスペインの間で和平条約が締結され、国際法上アメリカがフィリピンの領有権を獲得した。こうしたなかで、革命軍とアメリカ軍との関

係は悪化の一途をたどり、1899年2月にフィリピン・アメリカ戦争の火蓋が切って落とされた。アメリカ軍はゲリラ戦で苦戦を強いられながらも大量の武器・弾薬を投入して革命軍を鎮圧した。アメリカ軍は12万人の兵力を投入し、4000人の戦死者を出し、他方、アメリカ軍による大量虐殺による革命軍の戦死者は1万6000人、飢餓や疫病によるフィリピン人死亡者は20万人に及んだという。アメリカ政府は当初、軍政をしいたが、1901年7月に民政に移管しつつ平定作戦を続けた（池端・生田1977：80-81；池端1987：200-203；永野1995：13-14）。

1899年3月末に首都マロロスがアメリカ軍の手に落ちると、マビニは4人のきょうだいが担ぐハンモックに乗ってヌエバ・エシハ州の州都カバナトゥアンに逃れた。そしてアギナルドに対して健康上の理由で革命政府の要職を退くことを願い出た。アギナルドは辞職を受け入れつつ、マビニを革命政府の最高裁首席判事に任命した。マビニはこれを受け入れたものの、1899年12月にヌエバ・エシハ州クヤボ町でアメリカ軍に逮捕されたため、その役割を果たすことはなかった。この間、アギナルドはルソン島山岳地帯で逃避行を続けていたが、1901年3月にアメリカ軍に逮捕され降伏し、革命政府が崩壊した（Majul 1964: chap. 15; Zaide 1970: 285-286; Majul 1967: 11-13）。

マビニと4人のきょう代いは逮捕後にマニラの刑務所に収容され、1900年9月に釈放された。ところが、マビニはアメリカ政府に忠誠を誓うことを拒否し続け、同胞が引き続きアメリカ軍と戦い続けている状況のなかでアメリカ軍に対する批判的記事を發表したため、1901年1月に軍政下アーサー・マッカーサー將軍の命令によってグアム島に追放された。しかし1903年2月になると、マビニはアメリカ政府へ忠誠を誓い、マニラへの帰還を果たすが、コレラ罹患により同年5月13日に弱冠38歳でこの世を去ったのである（Majul 1964, chap. 16; Zaide 1970: 286-287; “Apolinario Mabini” 1990: 25; Majul 1996: chap. 13）<sup>(3)</sup>。

次節では、以上のマビニの略歴を念頭に置きながら、彼が遺した独立革命遂行上の心得としての「真実の十戒」に接近することにした。

## 2. マビニの「真実の十戒」

マビニは1898年6月12日の独立宣言日に革命政府に受け入れられた直後から、アギナルドの首席顧問として活発な活動を開始した。前述のように同年6月23日のアギナルドの大統領布告を起草したほか、同年6月24日に「真実の十戒」と「フィリピン共和国憲法プログラム」を小冊子として印刷し、革命政府の理念とその骨格を自ら提示した。さらに同年7月6日になると、アギナルドは「真実の十戒」を「フィリピン共和国憲法プログラム」の序文として位置づけ、この小冊子を革命政府の公式文書として印刷し広く公開することを認可した（Majul 1964: 51, 57-58; Gealogo 2019: 96）。とくに「真実の十戒」は、マビニが提示した革命理念を体現しており、以下は、その全文（英語版）の邦訳である（Mabini c2007: vol. 1, 103-105）。

1. 神をすべてのものより愛し、名誉を最優先にしましょう。神はすべての真実、すべての正義、そしてすべての活動の源であり、名誉はあなたに真実であり、正義であり、勤勉であることを求める唯一の力です。
2. 神を崇拜する形は、あなたの良心が最も正直で適切だと考えるものであるべきです。なぜなら、神はあなたに対して良心を通して語りかけ、あなたの不正行為を責め、善行に対して称賛するからです。
3. 神が授けた特別な才能を伸ばし、自分の能力に応じて働き、学びながら、善と正義の道を逸れずに歩んでください。これによって、自己の完璧さを達成し、それによって人類の進歩に貢献することができます。こうして、神がこの世においてあなたに授けた使命を果たし、それを達成することであなたが榮譽を得、榮譽を持つことで神を崇高にすることになるでしょう。
4. 神とあなたの名誉に続いて、自分自身よりも国を愛しなさい。なぜなら、あなたの国はこの世

で神があなたに授けた唯一の楽園だからです。それはあなたの人種の唯一の遺産であり、先祖からの唯一の相続財産です。そして、あなたの子孫の唯一の未来です。あなたの国があるおかげで、あなたには命、愛、興味のあることがあります。幸福、名誉、そして神も。

5. 自分自身の幸福よりも、あなたの国の幸福を追求し、理性、正義、そして仕事においてあなたの国が主導的な影響をもつよう努めてください。もしもあなたの国が幸福であれば、あなたとあなたの家族も幸福になるでしょう。
6. あなたの国の独立を追求してください。なぜなら、あなた自身だけがあなたの国の偉大さと昇華に真の興味をもつことができるからです。あなたの国の独立はあなた自身の自由を意味し、その偉大さはあなたの完成を意味し、そしてその昇華はあなた自身の栄光と不朽性を意味するからです。
7. あなたの国では、あなたや仲間たちによって選ばれていない人物の権威を認めないようにしてください。なぜなら、すべての権威は神から由来しており、神は各個人の良心に語りかけるように、町全体のすべての個人の良心によって選ばれ、宣言された人だけが、本当の権威を行使することができるのです。
8. あなたの国が共和国として構成されるよう努力してください。君主制であっては決してなりません。君主制は一つまたは複数の家族に権力を与え、王朝の基礎を築くこととなります。共和国は理性に基づき国を崇高で品位あるものとし、その自由によって偉大であり、労働の結果として繁栄し輝かしくなります。
9. あなた自身を愛するように隣人を愛しましょう。なぜなら、神は神とあなたに助け合う義務を課し、神があなたに対しておこないたくないことを、あなたが神におこなってはならないと命じたからです。しかし、もしも隣人がこの神聖な義務を怠り、あなたの生命、自由、財産に危害を加えようとしたら、あなたは隣人を破壊し、打ち砕くべきです。なぜなら、自己保存の至高の法則が優先されなければならないからです。
10. 常に同胞を隣人以上の存在としてください。彼はあなたの友人であり、きょうだいであり、少なくとも唯一の運命、同じ幸福と悲しみ、同じ願望と興味によって結ばれた仲間です。

それゆえ、人種や家族の利己主義によって確立および維持された国家の境界が残っている限り、共通の敵と戦うだけでなく、人生のすべての目標を達成するためにも、あなたはあなたの国と完璧な連帯の視点と利害をもって結ばれなければなりません。

マビニの「真実の十戒」は、「モーゼの十戒」に準じて書かれたものであるが、「モーゼの十戒」の場合、各項目がひとつの文章として簡潔にまとめられているのに対して、マビニの「真実の十戒」は、項目ごとの文章が比較的長く、何をすべきか具体的に表現されているところにその特徴がある。その基本的趣旨は、「神のもとに隣人を愛し、個々人の利害の違いを超えて、ひとつのコミュニティとしての独立した共和国設立のために努力せよ」というものである。

マビニが「真実の十戒」を提示したとき、アギナルドを中心とする革命政府はその独立革命遂行にあたり、重大な局面に遭遇していた。前述のように米西戦争とのからみによってアメリカ軍がすでにマニラに達しており、革命軍はスペイン軍との戦いにおいてはアメリカ軍と共通の敵をもっていたが、スペイン軍との戦いに勝利したときのアメリカ軍の革命軍に対する対応については未知数であった。他方、革命軍はマニラと周辺諸州からルソン島中央部や北部へとその勢力を拡大していったが、各地方の町長・町役人・地主・商人などの富裕層だけでなく、一般民衆（農民や労働者たち）をも組織しなければならないという難題を背負っていたのである。

マビニが遺した多くの文書を渉猟し『マビニとフィリピン革命』をまとめたセサール・A・マフルによると、当時、マビニはすでにアメリカがフィリピンを領有しようとする野心を抱いていたことを見抜いていたとする。マビニは言う、「自分たちを欺かないようにいたしましょう。アメリカ人は、スペイン人や他のヨーロッパ列強と同様に、この美しいオリエント海域の真珠を欲しがっています。しか

し、私たちは彼らよりもそれをもっと強く切望しています。それはただ神がそれを私たちに授けたからだけでなく、私たちがすでに多くの血を流して手に入れたからです」(Majul 1996: 121)。

さらにマブールは、マビニが、フィリピン人が独立を勝ち取るためには、外国による支配を打倒する意味での「外部革命」(external revolution)のみならず、人々を落ち込ませる精神的な状態を取り除き、外国に支配されることを容易にする習慣や悪癖の枷から解放するためのプロセスとして、「内部革命」(internal revolution)を必要としたことに注目する。この革命の二側面は相互に密接に連携しているので、外国人による支配が不可能となるほどに人々が強化すべき徳を身につけることが重要となる。マビニはこれを「社会の再生」と呼び、革命運動は、過去の制度の根本的な再評価と社会的関係の再定義がおこなわれない限り達成できないとする (Ibid.: 121-129; Majul 1964: 52-55)。したがって、マビニの「真実の十戒」とは、「社会の再生」をめざした「内部革命」実現のための心得とみることができよう<sup>(4)</sup>。

次節では、アメリカ軍への忠誠を拒否してグアム島に追放されていた 1901-1903 年にマビニが執筆した『フィリピン革命』について検討する。

### 3. マビニ著『フィリピン革命』を読む

本節では、マビニの『フィリピン革命』を、著名な文筆家として知られるレオン・マリア・ゲレロの英訳書 (Mabini 1969) によって読み解くことにしたい。訳者序文によると、この英訳の仕事はフィリピン国家歴史委員会から委託された。英訳は、1931 年に出版されたマビニ文書集第 2 巻に収録されたスペイン語原文 (Mabini 1931: vol. 2, sexta parte) に基づいておこなわれた。このマビニ文書集を編集したテオドロ・M・カラウ (当時、国立図書館長) によれば、マビニはみずから英語版も作成していたという。しかし、訳者のゲレロはその英語版をみる機会はなかったとしている (Ibid.: v)<sup>(5)</sup>。

本小著は訳者序文と本文 72 頁からなる。本文の構成は、「献辞」、「序論的声明」、「第 1 章 政治の革命と進化」、「第 2 章 スエズ運河開港以前のフィリピンにおけるスペイン支配」、「第 3 章 ブルゴス、ゴメス、サモラ三神父の処刑の原因と影響」、「第 4 章 革命前のスペイン統治」、「第 5 章『ラ・ソリダリダード』が求めた変革」、「第 6 章 リサールの小説」、「第 7 章「フィリピン民族同盟」とカティブーナ」、「第 8 章 革命の第一段階」、「第 9 章 革命の進展」、「第 10 章 革命の終焉と崩壊」、「第 11 章 結論」となっている (Ibid.: vii)。この構成からみる限り、本書は、フィリピン諸島の住民がひとつの国民としてまとまるために独立革命が起きたにもかかわらず、それを担った革命政府がなぜ崩壊するにいたったのか、その構造的要因について歴史的背景を踏まえて鋭利に分析するために執筆されたことを窺うことができる。

マビニは「献辞」でこの小著をマビニが神父になることを望んでいた自身の母に捧げたあと、「序論的説明」では、彼がなぜ最終的にアメリカ政府に忠誠を誓ったのか、その理由を次のように述べている。「彼ら [フィリピンの人々] が自分たちの権利のために戦い続ける力を欠いていると感じている今、私は同様に彼らの側に立ち、絶望するのではなく、正義、そして未来に対して彼ら自身でより大きな自信を持つように伝えるべきだと信じます」。つまり、「私は人々の声に従っているという信念で戦いに参加しました。今は同じ理由で戦いをやめるのです」(Ibid.: 9)。そしてこれからの希望的展望として、以下のように綴るのである。「共同体の生活をより狭隘にしないようにしながら、ひとり一人の市民に特定の権利を行使することを保証して、アメリカ合衆国が一定の自由を私たちが獲得することを適切だと認識した今、私たちが求めるものはその権利だけであり、私たちが欲しているのは文化と福祉の財産を増やすための行動の自由だけであることを示すことが求められているのです……」(Ibid.: 10)、と。以下、各章の内容を簡潔にまとめることにしたい。

「第 1 章 政治の革命と進化」で、マビニは、政治の「革命」(revolution) と「進化」(evolution) との違いについて説明する。前者の「革命」が、司法・行政・立法の三権からなる政治組織の暴力的変化を生み出す大衆運動であるのに対し、後者の「進化」は、緩慢かつ持続的な政治組織の変化をもたらす運動を意味する。したがって、一般的に「革命」とは、もはや「進化」では改革が達成できないと判断

された場合に起きる政治運動であるとされる (Ibid.: 13-15)。このように「革命」と「進化」を定義したうえで、マビニは第2章から第6章までを政治的進化を求めた時代、そして第7章から第11章までを政治的改革の時代として、それぞれの特徴を描写していく。

「第2章 スエズ運河開港以前のフィリピンにおけるスペイン支配」では、1869年のスエズ運河開港をフィリピンの政治革命の契機として位置づけ、16世紀半ばから19世紀半ばの3世紀にわたるスペインの植民地支配のもとでは国家を統一するための意識が住民の間に高まることはなく、諸外国との交流も途絶えていたとされる。ところが、「第3章 ブルゴス、ゴメス、サモラ三神父の処刑の原因と影響」で語られるように、スエズ運河開港とともに対外交易がさかんとなり、フィリピンにもヨーロッパの啓蒙的思想が届くようになった。こうしたなかで1872年にルソン島カピテ州の兵器廠で労働者たちによる暴動が起き、その暴動の先導者として、ブルゴス、ゴメス、サモラの3人のフィリピン人神父が処刑された。「ゴンブルサ事件」と呼ばれるこの事件は、フィリピン社会に大きな衝撃を与え、スペイン植民地支配の圧政を住民たちに強く意識させることになった (Ibid.: 17-23)。

それでは、「ゴンブルサ事件」当時にフィリピンではどのような植民地統治がおこなわれていたのだろうか。「第4章 革命前のスペイン統治」によると、スペイン国王が植民地フィリピンの司法・行政・立法権を掌握し、国王の代表としてスペイン人総督が軍の最高司令官を務めた。したがって総督は行政機構や警察組織に対して絶大なる権限を維持した。中央政府や州政府の行政官のほとんどがスペインから派遣され、彼らはフィリピン事情に精通することはなかった。こうした状況のもとで、1880年代にスペインに留学していた有産知識階層 (イラストラード) によるプロパガンダ運動が展開されたのである (Ibid.: 25-28)。

「第5章 『ラ・ソリダリダード』が求めた変革」では、グラシアーノ・ロペス・ハエナやマルセロ・H・デル・ピラールらがフィリピンの統治機構改革を目的として『ラ・ソリダリダード』を刊行したが、カトリック教会から強い抵抗を受けたとする。さらに「第6章 リサールの小説」では、ホセ・リサールの『ノリ・メ・タンヘレ (我に触れるな)』と『エル・フィリプステリスモ (反逆)』の二つの小説の内容を紹介し、リサールが読者に伝えたかったこととして、第1に、スペイン政府がフィリピン人の要求に耳を貸さなかった場合、フィリピン人は独立のために暴力に訴えることになるろう、そして第2には、フィリピン人は個人的野心ではなく、真の愛国主義に基づいて行動すべきであるとの2点を挙げている (Ibid.: 29-37)。

ついで「第7章 「フィリピン民族同盟」とカティプーナ」では、「政治的進化」、つまり緩慢な政治改革ではフィリピン人が希求する独立がスペインから得ることができない状況に直面した時期に、リサールによって「フィリピン民族同盟」が、そしてボニファシオによってカティプーナが設立され、とくに後者がマニラの間層の間で拡大したことに注目する。そして「第8章 革命の第一段階」では、1896年8月にカティプーナがマニラで武装蜂起し、リサールが同年12月にマニラで処刑されると、独立革命の嵐がマニラ周辺諸州へと広がったとする。しかし、1897年3月のテヘロス会議でのアギナルドとボニファシオの対立をへてボニファシオが粛清されたことは、ひとつの「犯罪」であり、それは「個人的野心が真の愛国主義を超えた最初の勝利」であった。そしてその年の末にアギナルドらがスペイン政府と結んだビヤクナバト条約は、独立革命運動に参加してきた人々にとって将来の政治改革についてなんら明らかにしたものではなかった、と批判的に捉えている (Ibid.: 39-49)。

「第9章 革命の進展」は、米西戦争の勃発によりアメリカがフィリピンに介入し、アギナルドが香港亡命から帰国してからマビニ自身が革命政府の要人として活動した時期を扱っている。ここでマビニは、アメリカ軍がマニラに到着する前に革命軍がスペイン軍を撃退しマニラを開城することができていたら、アメリカ軍との関係に問題は生じなかっただろうという。1898年6月に革命政府は独立宣言をおこなったが、この独立宣言は国際的には認められておらず、アメリカ政府と交渉する必要があった。そうこうするうちにアメリカは単独でスペインとパリ条約を結び、1899年2月にフィリピン・アメリカ戦争が勃発したからである。マビニは言う、「間違いなく、マッキンリー大統領はスペインの圧政を打破したが、明らかに、それはアメリカ流の別の圧政と置き換えるためだけのものにすぎなかった」

(Ibid.: 51-58)、と。

そして「第10章 革命の終焉と崩壊」では、フィリピン・アメリカ戦争のもとで革命政府が無残にも瓦解する過程が描かれている。ここでマビニがとくに取り上げたこととして、アメリカ軍の猛襲に対して不利な戦いを強いられつつも、果敢な戦いを続けたアントニオ・ルナを高く評価している点が注目されよう。広く知られるように、ルナはアギナルドと対立し殺害された。マビニは言う、「アンドレス・ボニファシオの死は、アギナルドという人物に無限の権力欲があることを明らかにした。そして、ルナの個人的な敵たちは、アギナルドのこの弱点を巧妙な陰謀で利用し、ルナの破滅をもたらすために画策した」。「革命は失敗した。なぜなら間違ったかたちで指揮されたからである。……人々にとって最も有益な者たちを支援する代わりに、嫉妬心から彼らが無価値にしたからである」(Ibid.: 59-64)、と。

「第11章 結論」では、このエッセイが模範的なフィリピン史となるよう心がけているとしつつ、革命政府を間違った方向に導いたとしてアギナルドを批判する。同時に革命軍を構成する兵士たちにも女性に性被害を与えるなどの問題点があったことを指摘する。したがってフィリピンで民主的政府を樹立するためには、革命政府の指導者のみならず、一般大衆のさらなる努力が必要であると、マビニは訴える。そして民主的統治に向けてアメリカ政府とフィリピン人が和解することに期待するのである(Ibid.: 65-72)。

このようにマビニの小著『フィリピン革命』は、革命の歴史的背景を踏まえたうえで革命が挫折した要因として、スペインとアメリカに対する「外部革命」と革命政府を率いたエリート層と一般大衆に関わる「内部革命」の双方における脆弱性を抽出しているところにその特徴があるといえよう。とりわけ「内部革命」が果たせなかった主因として、革命政府が本来めざすべき独立革命への道から逸脱したことが強調される一方で、同時に一般大衆の側にもひとつの民族としての市民意識が未成熟であり、革命政府としてそれを育成する努力がなされなかった点が提起されていることは重要である。この意味で、『フィリピン革命』は、すでに体力的に衰弱して余命いくばくもない状況にあったマビニが、民族独立と国民国家樹立のためには何が必要なのか、フィリピン人に訴えた啓蒙書と位置づけることができる。

## むすび

本小稿では、まずマビニの略歴をたどり、ついで『真実の十戒』と『フィリピン革命』の2点を通して、革命政府においてマビニが果たした役割について検討した。マビニは比較的貧しい家庭に育ち、苦学してサント・トーマス大学を卒業した経歴のもとで革命政府に参加したことにより、一般大衆の願望を理解しながら、革命政府の指導者がおこなうべきことを熟考した人物であった。こうしたマビニの思想的特徴を鋭利に分析したのが、セサル・A・マフルである。マフルの著書『フィリピン革命の政治と憲法の理念』から、以下の言葉を引用して本稿を終えることにしたい。

19世紀の最後の四半期には、ごくわずかのフィリピン人しかイラストラードと呼べるようなレベルまでの教育を受けることができなかった。……どのような動機が関与していたかにせよ、いかなる場合でも、フィリピンの大衆は常に(そして今も)教育を受けた人々に指導されることを期待した。指導者たちへの信頼、彼らに欺かれないという信念、そして指導者たちが彼らのために最善なことは何かを知っているという前提が、彼らの心情の一部にあった。リサールとマビニはそれを理解していた。このエリートの知性の優越性は、自分の考えとは、言葉で表現できない人々の思考を表現したものであるとするマビニの主張において端的に示されていたのである(Majul 1967: 37-38)。

(ながの よしこ 客員研究員 神奈川大学名誉教授)

## 注

- (1) これら三つの文書は、マビニの著述集 (Mabini 1931) に収録されている。その英訳版として、(Mabini c2007-2009) と (Mabini 2022) を参照。
- (2) マフルには、マビニのフィリピン革命への関与を伝記風に追跡したもう一冊のマビニ論 (Majul 1964) がある。
- (3) マビニに関わる逸話については、(Joaquin 1977: 133-154) と (Ocampo 1995: 3-24) をみよ。
- (4) マビニの思想におけるメシア的性向の検討については、(Majul 1967: 80-81) と (Gealogo 2019) を参照。
- (5) なお、近年公刊された英訳として、(Majul c2009: vol. 2, part 6) がある。

## 参考文献

- Aguilar, Filomeno V., Jr. (2015) "Church-State Relations in the 1899 Malolos Constitution: Filipinization and Visions of National Community," *Southeast Asian Studies*, vol. 4, no. 2.
- "Apolinario Mabini" (1990) IN *Filipinos in History*, Vol. II, Manila: National Historical Institute.
- Gealogo, Francis A. (2019) "Masonic Parallels in Mabini's True Decalogue and Constitutional Program," *Philippine Studies*, vol. 67, no. 1.
- Joaquin, Nick (1977/2005) *A Question of Heros*, San Juan: DBI Printing Service; Pasig City: Anvil Publishing.
- Mabini, Apolinario (1931) *La Revolución Filipina: (con otros documentos de la época)*, 2 vols., Manila: Bureau of Printing.
- Mabini, Apolinario (1969) *The Philippine Revolution*, translated by Leon Ma. Guerrero, Manila: National Historical Commission.
- Mabini, Apolinario (c2007-2009) *The Philippine Revolution Evolution: with other documents of the epoch*, 2 vols., Manila: National Historical Institute.
- Mabini, Apolinario (2022) *La Revolución Filipina: The Political Writings of Apolinario Mabini Vol. 1 (1898-1899)*, Manila: National Commission of the Philippines.
- Majul, Cesar A. (1960/1996) *Mabini and the Philippine Revolution*, Quezon City: University of the Philippine Press.
- Majul, Cesar A. (1964) *Apolinario Mabini, Revolutionary*, Manila: National Heroes Commission.
- Majul, Cesar A. (1967/1999) *The Political and Constitutional Ideas of the Philippine Revolution*, Quezon City: University of the Philippine Press.
- Ocampo, Ambeth R. (1995) *Mabini's Ghost*, Pasig City: Anvil Publishing.
- Zaide, Gregorio F. (1970) *Great Filipinos in History: An Epic of Filipino Greatness in War and Peace*, Manila: Verde Book Store.
- 池端雪浦・生田滋 (1977) 『東南アジア現代史 II フィリピン・マレーシア・シンガポール』 山川出版社。
- 池端雪浦 (1987) 『フィリピン革命とカトリシズム』 勁草書房。
- 永野善子 (1995) 「歴史的背景」 綾部恒雄・石井米雄編 『もっと知りたいフィリピン 第2版』 弘文堂。